慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	山口, 仁(Yamaguchi, Hitoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.216- 217
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0216

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

山口　仁

書物の意味は書き手一人の意図によってだけではなく、読み手や社会との関係で構築されるものだとすれば、拙著も人々に読まれ論じられることによって意味を持つことになるのだろう。評者の津田正太郎先生には、この場を借りて御礼申し上げたい。

津田先生が言及された拙著 234 ページ（ジャーナリズムを論じることの社会的機能について論じた箇所）は、現在、筆者が重要視している事柄である。書評ではそこがピンポイントで取り上げられており、自分の問題意識を津田先生と共有できたようで、率直にいって嬉しかった。

ジャーナリズムとはコミュニケーションの一種であり、（社会問題を含む）事件・出来事を報道・論評する活動やその主体のことであるが、そうしたジャーナリズムを論じるということは「“社会問題を論じること”を論じること」である。なお、コミュニケーションはその当事者どうしが同じ価値観を共有していることを確認しあうために行われるという見方がある。これらをあわせて考えれば、ジャーナリズムに関する議論は同じ社会問題観（≒価値観・信念）を有する者達が自らの価値観を確認するためになされているという面を無視することはできない。

昨今のジャーナリズムをめぐる議論が、異なる社会問題観を有する者の間で了解不能・対話不能な状況（例えば特定の新聞社をめぐる議論、「フェイクニュース」をめぐる議論など）を生み出し、社会の分断の一要因になっていることを踏まえれば、筆者のこうした指摘には一定の説得力があると思う。しかも誰もが気軽に情報発信できる現代のメディア環境では、ジャーナリズムをめぐる論議は極めて大衆化・一般化している。ジャーナリズムを研究しようとすれば、研究者自身がこうした状況に巻き込まれ、理論的な見解を示すことは相当に難しい。そこにこの分野の「あやうさ」がある。

津田先生もこうした問題意識を共有しているようである。ただ、そうした状況に対する対応は筆者とは異なっている。津田先生は「（社会問題の）現実から距離を取るための努力ではなく、そこに近づくための努力」でこうした状況に向かおうとしている。一方で、そうした現実からは距離をとろうとする筆者のスタンスについて「生産的ではない」と評している。

こうした違いが生じる理由は、津田先生と筆者との間で何を「現実」とみなすのかに関して見解が分かれているからである。津田先生が言う「現実」とは、社会問題とされる状況に関する「現実」、もしくはそうした社会問題を報道するジャーナリズム活動に関する「現実」である。そうした「現実」に接近して適切な理解をすることが、社会問題やジャーナリズムの問題の解決につながるのであり、研究はそうした活動を通じて社会に（間接的に）貢献するべき…とい

山口仁「著者リプライ」
『三田社会学』第 24 号 (2019 年 7 月)　216-217 頁

う認識であると考えられる。

一方、筆者は違う「現実」も想定している。それは社会問題やジャーナリズムに関する現実を構築しようとする人々の活動という「現実」である。筆者は「社会問題」や「ジャーナリズム」それ自体だけではなく、それらの構築過程における人々の活動にも「現実」を見出す。そしてその分析と理論化に関心が（少なくとも本書では）向いているのである。言い換えれば、筆者が構築主義的アプローチを採用する目的は、「既存の同じ問いに関する異なる答え」を出すためではなく、「既存の問いと（共存可能な）異なる問い」を立てるためなのである。問うているものが異なるため、そこに見出される「現実」も異なるものになる。

したがって、社会問題の実態をめぐる「オントロジカル・ゲリマンダリング（OG）」に関しても、それが異なる問いの下で生じたものであれば、大きな瑕疵にはならないと筆者は考えている。確かに、構築主義的アプローチを「同じ問い」に関する論敵・対立者に対して優位に立つために採用しているのであれば、OG はズルやごまかしになるだろう。だが、本書はそうした意図で構築主義的アプローチを採用していない。

もっとも現在のメディア環境では、自分に都合よい「研究者の隠された意図」を邪推し暴露したつもりになって論難してくる者もいるだろう。SNS にはこちらが意図したつもりではないことを「勝手」に推測して反論してくるような者もいる。SNS の前線で盛んに活動している津田先生によるこうした指摘は相応の説得力を持つ。

ただそれでも筆者は、津田先生のいうような研究にあたって自分の依拠する価値観を明確にして議論するべきという発想をまだ取り入れようとは考えてない。津田先生は「貧困や差別は解消されるべきだ」、「事実に即さない報道は控えるべきだ」などを自分の依拠する価値観であると述べている。確かに筆者もそうした価値観を持っていないわけではないが、もし「事実を報道しなくてもかまわない」「貧困や差別は問題ではない」という価値観の持ち主でも納得できる論理・理屈とそれを生み出す問いを求めていきたい（もちろんこうしたものが、時評的な社会問題評、ジャーナリズム評にとって「すぐに役立つ」わけではないだろう）。あえて言うならば、既存のものとは「『異なる問い』を立てて理論化を志向すべき」というのが筆者の依って立つ価値観である。ただ、研究活動における「問い」それ自体の有用性は、一本の論文や一冊の著書の執筆という個別の研究活動の外部、つまり中長期的な研究活動の過程で構築されていくものであるだろう（だから拙著でもこうした事柄は主に「あとがき」で論じている）。

とはいえ、社会学は自らの活動をも議論の対象とする自己反省的な議論を常に繰り返し提供してきた（例えば近年では矢澤修二郎編『再帰的＝反省的社会学の地平』東信堂・2017 年などは参考になった）。筆者も再度こうした議論を踏まえたうえで繰り返しジャーナリズムやメディアに関するさまざまな問いを立てていきたいと思う。それが「あやうい」分野における研究活動の要であると筆者は考えているからである。

（やまぐち　ひとし　帝京大学文学部）